



Title	半田知雄における移民のなやみ：ブラジル日系社会史の語りと移民の戦争経験を中心に
Author(s)	ソアレス モッタ, フェリッペ オウグスト
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2013, 47, p. 19-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54392
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

半田知雄における移民のなやみ

— ブラジル日系社会史の語りと移民の戦争経験を中心に —

ソアレス モッタ フェリッペ アウグスト

キーワード：ブラジル日系社会史／半田知雄／戦争／移民の心理

問題の所在

本稿は、半田知雄著『移民の生活の歴史』（家の光協会 東京 1970年）を取り上げ、半田がいう「移民のなやみ」の正体について一考察を試み、半田における移民の戦争経験の思想的な価値を中心に論じる。また、戦前移民の視線を通して書かれた歴史書である『移民の生活の歴史』において、移民の戦争経験とは戦前や戦時期の移民に対する規制を指すだけではなく、祖国日本の政治体制と思想背景の変化と戦後移民との出会いとも関係があると論じる。

移民としてブラジルに渡った日本人を、移住時期を基に大別するなら1908年から1941年まで、および1953年から1973年¹⁾までの二つのグループに区分することができる。この両グループとその子孫は現在のブラジル日系社会の大半を成しているといってもよい。便宜上、1908年から1941年まで移住した移民を「戦前移民」と呼び、移民再開以後に移住した移民を「戦後移民」と呼ぶことにしよう²⁾。

戦前移民と戦後移民を区別する移住時期と表裏一体の関係にあるのは、移民がどこで、またどのような形で、第二次世界大戦を経験したかという問題である。また、その戦争経験たるものは何であり、どういう風に受け止められたかという問題である。この二つの問題は、移民の心理の変遷過程を念頭

に置きながら半田知雄が綴るブラジル日系社会史を読み直すにあたって、戦前移民と戦後移民の違いを最も際立たせる中心的なテーマである。

半田はブラジルへの戦前移民であり、日系社会の知識人層に属する著名な画家、評論家、移民史家として知られている。『移民の生活の歴史』において彼は、ブラジル日系社会史を1970年代当初まで回顧的に論じ、生活の場面を中心に移民の感情の世界を強く意識した語りによってブラジル日系社会史の一種の総括を試みる。移民によって書かれた総合史として本書はおそらくブラジル日本移民を巡る最も有名な歴史書であり、細川周平はそれを「移民史の標準版」(細川、2013 p.212) と呼んだ。

『移民の生活の歴史』において半田知雄は、ブラジル日系移民史を単に系統的に整理するのではなく、移民という近代社会が生んだ現象を考えるために示唆を与えてくれる。本書を書くにあたって、半田は1960年代末までに蓄積してきた移民史を参考にし、さらに自分の移民としての経験を大きく活用した。移民が自己の歴史を顧み、それを咀嚼する姿勢が本書にみられる³⁾。

ブラジル日系社会史を生涯のテーマにした半田知雄にとって、第二次世界大戦は決定的な思想的意味を持っている。『移民の生活の歴史』の随所において、戦争とそれが日系社会に及ぼした影響が見られるといつても過言ではない。もし本書をブラジル日本移民の精神史として読むのであれば、第二次世界大戦と移民が異国で遭遇する戦争経験は、半田知雄の思想にどのように作用しているか。こうした問題を具体的に追求することによって、民族至上主義、軍国主義、帝国主義や国家主義、近代がもたらした幾つかの思想の間に挟まれ移動し、祖国に対する郷愁と移住国の政策に虐げられた移民の姿が垣間見える。さらにまた、ブラジル日系社会史の暗黒時代といわれる戦後の勝負抗争について再考するきっかけになるかもしれない⁴⁾。本稿ではそれらの問題について考察するものである。

I. 移民の戦争経験をどう捉えるか

ブラジル日本移民が経験した戦争とはどういうものであったか。

ひとまず、『移民の生活の歴史』において半田知雄がいう「移民」とは、主に戦前移民を指しているといえる（ソアレスモッタ、2013）。したがって、本稿で議論される「移民のなやみ」とは戦前移民特有のものである。

異国において祖国の敗戦を迎えた戦前移民にとって、第二次世界大戦ほどの心理を決定付けた歴史的な出来事は他にない。先行研究において、戦争、とりわけ敗戦経験によって移民のアイデンティティが大きく変化したことは既に議論されている（例えば、前山、1982）。終戦は、断ち切られていた祖国との関係を再生させるが、同時にまさしくその祖国との一種の乖離をもたらした。戦時中においてブラジル政府に敵性国民として見なされていた日本移民は、終戦によって敵性国民ではなくなり、住処であるブラジルは日本との外交関係を再開した。戦時中に禁止されていた公の場で日本語の使用、民族教育の実施や日本語出版物に対する禁止令は徐々に解かれた。日本からの品物、報道がまた入ってくるようになった。何年か経てば新しい移民も渡って来た。戦時中に続いた祖国との断絶は、移民が戦時に渴望していたとは異なる形だが、修繕された。同時に、移民が夢を見ていた祖国は戦争によって破壊され焦土に化し、旧植民地から雪崩れ込んできた余分人口を吸収することに悶えていた。戦前移民の一部分はそれでも戦時期に願っていた帰国を果たすが、それはごく少数であった。事実上、終戦は多くの移民に永住を決意させたのである。

1945年の太平洋戦争終結と日本敗戦にともない、大日本帝国が解体され、旧植民地が解放された。無条件降伏をした日本には、この日付をもって文字通りの戦後がはじまったと言っても間違いではなかろう。戦犯者の裁判によって、帝国主義と軍国主義の思想は舞台に上げられ、公的に糾弾され、排除すべくものとして誰の目にも晒される。天皇は現人神ならず象徴であることが憲法に編入され、教育勅語を基にした教育は廃止された。

しかし、ブラジル日系社会においては、1945年を戦後の始まりとして捉えることはできない。むしろ、移民の本当の戦争経験は1945年から深刻化したと言ってもよい。理由は明瞭である。敗戦が日本社会にもたらした思想的な変化は、世界の裏側の日系社会に及ばなかったのである。その思想的な溝こそ、戦前移民の戦争経験を特徴づけるものである。

ブラジルの国家主義政策と祖国の国粹主義的な思潮に挟まれて過ごした移民の戦前期、祖国を想い渴望しその断絶を痛ましく過ごした移民の戦時期、それから混乱時代を含めた移民の戦後期を一つの長いプロセスとしての移民の戦争経験とみなければならない。戦前移民の心理は、その戦争経験によって根本的に変化させられ、その痕跡は一生拭えないものとして移民に刻印される。『移民の生活の歴史』の第9部「深まりゆく移民のなやみ」において、初めて戦争を主題として取り上げる時、半田知雄はこう言う：

ここでは一九三〇年ころから、ヨーロッパ戦争につぐ太平洋戦争の勃発、および終戦までの移民たちの生活を、その精神的あるいは心理的な面を重視しながら叙述しようとするのであるが、眼目とするところは、戦後の勝組の抵抗にまでつながる移民心理の発展・推移をみきわめようすることである。

(中略)

二つのナショナリズムの間にはさまって、移民がいかに悩みつづけたか、この前後十数年にわたる苦悩は、ほとんど移民の宿命ともいえるもので、その間に戦争という大事件がはさまって、おそらく二度とくりかえすことのないような特殊性をもって展開するのであった。(半田、1970、pp.589-590)⁵⁾

第二次世界大戦を大日本帝国外において敗戦と戦後を過ごしたブラジル日本移民は、帝国内の日本人が遭遇した戦争経験と異質なものを経験した。また、戦前移民と戦後移民の戦争経験の相違そのもの自体は、移民の心理を大

きく変化させる要因である。筆者にとって、それこそ半田知雄がいう「移民のなやみ」の意味を解く鍵になる。

1950年代になって、ブラジル日本移民が再開される。入国する移民のほとんどは、帝国内において戦争を経験した。戦場を見た者もいれば、旧植民地から引き揚げ、ブラジル移住を決意した者もいた。何よりも、占領された日本と新しい政治体制を経験した者がほとんどであった。それら戦後移民がブラジルに入ってきた時、戦前から祖国に疎遠になっていた移民の多くは、間接的であるが、初めて戦後の祖国と接することになったのである。その時、自分たちが想っている祖国はもはや存在していないことを知らされた移民の心境を我々はどう理解すべきか。考え方方が古く、前時代の長物にみえた戦前移民が、ノーヴォ（戦前移民が戦後移民のことを指すときに使用する呼称。ポルトガル語の「novo = 新しい、新来者」に由来をもつ）に嘲弄される際に呼ばれた「ブラジル・ボケ」という言葉は、我々にその悲劇の痛切さをいっそうに感じさせる。

ブラジルと大日本帝国の政治的・思想的な特殊性、両国の戦時中の対立的な立場があいまって、戦前移民の心理の変遷に大きく作用した。その変遷は敗戦後にも続き、戦後移民との出会いによって結実するといえる。戦前移民のなやみが、祖国から来た他者⁶⁾との出会いによって複雑化するとは何と皮肉なことであろうか。IIIではその問題について論述するが、その前に戦時期の状況を見ておこう。

II. 移民の戦争経験——複数の「主義」の狭間と民族教育の必要性

戦前移民は祖国との繋がりを強く意識していた⁷⁾。しかし、移民が戦時期を過ごすのはやはりブラジルにおいてあり、その国での出来事は最も移民の戦争経験を影響する。我々も、当時のブラジルに目を向けなければならぬ。

ブラジル日本移民が始まるのは1908年、ブラジル政治史が旧共和政期と

呼ばれる時期である。1822年、ポルトガルから独立を果たしたブラジルには、およそ75年間の帝政期を経た後、1889年に共和政が樹立する。アメリカ合衆国憲法とアルゼンチン憲法の強い影響を受け、1891年に新しい憲法が公布され、それにより貴族制度が廃止され、今までの県（província）は新たに州（estado）となり、正・副大統領の直接選挙、三権分立が定められた。国名もアメリカ合衆国に因んで「ブラジル合衆国」と改められた。アメリカ合衆国同様に、各州は独自の州憲法と州軍を保有し、ブラジルは中央集権的な帝制国家から、地方分権的な連邦共和制国家に移行した。

本稿では共和政期の特徴に深入りせず、日本移民の導入はそれにおいて開始されたことだけを指摘するにとどめよう。本稿の主題である移民の戦争経験にとってより重要なのは、旧共和政期に次いで樹立されたヴァルガス政権である。

1930年11月3日に、旧共和政期から続いていた政治体制が崩壊し、ジェトゥリオ・ヴァルガスを大統領にする30年革命が勃発し、旧共和政期に終止符が打たれる。最初、ヴァルガスは臨時政府の首班として政権を掌握するが、1934年に行われた大統領選挙に当選し正式にブラジル大統領となる。1937年11月10日に、大統領選挙を眼前にし、ヴァルガスは議会を解散させ、クーデターを起こし独裁政権を樹立する。樹立された新政府は、中央集権主義で、連邦をなす各州はほとんどその自治権を奪われ、大統領から派遣された執政官（intervedor）が事実上各地を直接統治することになった。国家主義的・全体主義的な色合いの濃い「新国家体制」と呼ばれる、日本移民の生活が最も厳しく制限される時期が開始されたのである。

ヴァルガス政権は1945年、第二次世界大戦が終わるまで続き、15年間にわたる。1950年に、民主主義的な選挙を通してヴァルガスはもう一度大統領の座につくが、1954年、ピストル自殺を遂げる。共和国成立以来、最も長くブラジル大統領を務めた人物であり、20世紀ブラジル政治史の最も重要な登場人物の一人である。

ヴァルガス政権は、特にクーデター後の新国家体制の時期において、移民

の流入、民族教育の実施などをますます規制してゆく。しかし、新国家体制が樹立される以前から、ヴァルガス政権は既に国家統一の立場から、外国移民およびその子弟に対する急激な同化政策を進める。こうした政策（ポルトガル語の“nacionalização”による「ナシオナリザソン」）を半田知雄は以下のように定義する：

ナシオナリザソンとは、ブラジル国内のあらゆるものを、政治的・経済的・文化的に、ブラジル化しようとする運動であった。時と場合によって、国家主義運動、国民性、あるいは国民意識統一運動などと訳することができる。（p. 590）

ナシオナリザソンの政策は、外国移民を第二次世界大戦の勃発以前から規制し始める。日系移民に対する不信は新国家体制の樹立と第二次世界大戦の兆しを待たずに登場し、日本移民の不同化性を訴える排日的なディスコースは1920年代後半から既に確認できる。アメリカ合衆国の黄禍論やゴビノー伯爵⁸⁾の思想に強い影響を受けた反日的な政治家・思想家は1930年代に日本移民の排除を唱える。なお、1920年代後半から1930年代前半にかけてブラジル日本移民がそのピークを迎える。『ブラジル日本移民80年史』によると、1933年には日本移民が全外国移民数48,822人の50%強を占めたという（移民80年史編纂委員会、1991 p.85）。日本移民の入国数がこのような高い比率に達していることはその運動の一要因であるとも言える。

1934年7月16日、「1934年憲法」と呼ばれる新憲法が公布される時、主に日本移民を対象とする「外国移民二分制限法」が制定される。反日家で、日本移民の不適性を強力に提唱したブラジル人政治家の一人であったミゲール・コウト派の提出した各国移民制限条項は、字句の整理を経てこの日公布された憲法中に次の如く挿入された：

国家の領土内への移民の入国は移民の人種的ならびに体質的及市民的

資格〔の統合〕を保証するために必要なる制限を受くべし。ただし、各国移民入国は50年間にブラジルに定着したる当該国人の総数に対し毎年その100分の2〔2%〕の限度を超ゆることえず。(サンパウロ人文科学研究所、1996 p.77)

半田は移民二分制限法を顧みて、「自分たちが異国に島流しになったようなさびしさを感じた」(p.610)と書き残している。その法令が発令された時点で、日本移民の総入国者数は124,457人であり、年間割当数は2,489人となつた。

ただし、ブラジル政府が日本移民に対して抱く不信は単なるヴァルガス政権の国家主義的な政策に依拠しているだけではない。日清戦争を嚆矢に、大日本帝国の帝国主義のアジア進出はそれより以前から心配の目で見られていた。日露戦争、満州事変、日本国際連盟脱退、支那事変という出来事はブラジル政治界に懸念されていた。

ヴァルガス政権が独伊に宣戦布告をするのは1942年8月22日である。日本への正式な宣戦布告は1945年6月6日までに行われないが、実質上、枢軸国民として日本移民は独伊移民と同時期に敵性国民としてみなされる。ブラジル政府のその姿勢を表す具体的な行為としては、たとえば、1942年1月19日に導入される通行許可書（Salvo-Conduto）があげられる。サンパウロ州保安局によって公布される敵性国民に対する取締令は、保安局発給の通行許可書なしの旅行また保安局に予告なしの転居等々の禁止のみならず、自国語で記されたものの頒布、公衆の場での自国語の使用などを禁止する。移民にとって厳しいダメージとなつた。その当時、公の場で写生を禁じられた半田が工房に閉じこもり、幼年時代の思い出を頼りに移民の生活を描いた彼の最も有名な作品群を製作したという話は象徴的である⁹⁾。

1942年1月29日にブラジル政府は正式に枢軸国との国交を断絶し、在外公館を閉鎖する。半田によれば、1942年末に日本からの郵便物が最後のものとしてまとまってサンパウロに着く。祖国との関係の最後の一糸が切れる

時である。

ヴァルガスのクーデターと新国家体制の樹立と共に、新しい憲法が公布される。新憲法において、移民二分制限法がそのまま残されているが、それに加えて、児童教育についての条項がつけられていた。付け加えられた第151条によると、

14歳未満者に外国語教授禁止—外国人入国法第8章第85及第87条

農村学校の教授はブラジル国語をもって行い、14未満者に外国語の教授を禁じ、外国語印刷物の発行は其筋の許可を要す。(サンパウロ人文科学研究所、1996 p.86)

民族教育を規制し、移民の子弟をブラジル人（ブラジルは出生地主義国）に「変える」のは、ヴァルガス政権にとって急務であった。新国家体制の国家主義政策の中で、とりわけその方針が維持され、1938年に外国語教授禁止法と日語学校の全面閉鎖に発展していった。それについて半田知雄は、

（前略）新移民法が制定されると同時に、（中略）、ブラジルの日本移民は、はじめて自分たちが外国にでてきた移民であることを痛感させられたのであった。そして、自分たちの子孫が日本語習得の機会を失うことによって、自分たちから離れていくかもしれないという不安は、自分たちがまだこの国に同化しきれず、したがって子孫が、つきあいにくい「外人」と同じような人間になってしまふことは、民族の滅亡だとさえ感じたのである。移民にとって、民族の発展とは、日本人全体の発展ではなく、在伯二十万同胞の発展と錯覚されていたのであった。自分たちをよそにして、民族は考えられなかつたのである。（pp.611-612）

自分の子孫に日本語を教え、日本人として育てることが不可能になる時

に、日本移民の心理に大きな変化が起こる。移民にとって、外国語教育禁止法と日語学校の全面閉鎖は、祖国日本との精神的な離別を意味した。独伊の移民も、枢軸国の国民として、同様に規制されるが、半田の見解では日本移民の場合その規制が特に強い打撃を意味した：

ことに、日本のように、明治以来、教育勅語を教育の原理とする国民教育が徹底していた国の国民は、ブラジルの国家的立場からのナシオナリザソンは、民族的自殺をせまるものとして、移民の精神に、大きな衝撃を与えたのであった。(中略) 生活様式のあまりちがったブラジル人社会になじみきれずに、いわゆる同胞社会のなかで、移民の不自由をかろうじてみたしてきた多くの一世たちには、そうしたブラジル人的立場を理解する力はなかった。それは終戦になるまで、心の片隅におしやられたままになっていたのであって、大勢はブラジルのナシオナリザソンによって祖国への郷愁をつよめるだけであった。(p.592)

文化面に対する規制は、「移民の心理を、ますます暗いものにしていった」(p.589) と半田知雄が記している。ここで「民族的自殺」という表現は大きな意味を帯びる。祖国との乖離を意味し、自分の子弟を日本人として育てることを禁じた外国語教授禁止法は、半田にとって、その当時の移民の心理の変化を理解する上で必要不可欠である。民族教育抜きでは、戦争が終わってからの帰国も果たされないからである。

異国にいながら、自分たちを天皇陛下の赤子であると確信している移民にとって、民族教育は祖国との絆そのものを意味する。祖国に帰るならば、日本人として帰国し、子どもたちも日本人として連れて帰らねばならない。戦時中における移民の心理は、戦後の帰国の夢に依拠しており、民族教育はその夢を叶えるための必須条件であった。民族教育が規制される時、日本移民は日本人として生き、日本人として自分の子どもを育てることを禁じられる。その時、移民の心に長く生き続けた帰国願望がより強固になる。「戦争

が済んだら」という語りが最も盛んになるのは、この時期である。

III. 祖国に託される希望

過酷な状態に置かれるときに、安全で、かつて幸せに暮らしたことのある場所に帰りたがるのは人間の本能であろう。銃殺隊の前に立たされる死刑囚は、家庭（ホーム）の象徴である「お母さん」と大声で呼ぶという話はよく聞くし、母胎回帰願望という言葉もある。したがって、ブラジル政府に敵性国民としてみなされ、多数の規制を課される日本移民が戦時中に「祖国」に帰りたがったのは驚くべきことではなかろう。

一見に簡単に見える移民の帰国願望だが、実はその根元に「移民のなやみ」を解明するための貴重なヒントを潜めている。いったい、戦時に移民が帰りたがる祖国とはどういうところであろうか。

まず、ブラジル日本移民の帰国願望は戦争が興したものではない。前山隆を先頭に、移民の移住戦略の変遷をめぐる先行研究で議論されてきたとおりに、ブラジル日本移民は当初、一獲千金と衣錦還郷を目指して、短期出稼ぎとして渡伯する。そのストラテジーは徐々に短期から長期へと変化し、敗戦とともに永住に変わる（前山、1982など）。

移民の帰国願望は戦争によって引き起こされたのではなくても、それによって深刻化されたといえる。輪湖俊午朗が『バウル管内の邦人』に紹介している調査に拠れば、1939年には、サンパウロ州最大の日系人集住地であったバウル総領事館の管轄内の移民の85%が帰国したがっていたという。¹⁰⁾ 1939年に刊行された輪湖のこの著作は、既に多数の規制を課されている移民を対象に実行された調査に対する報告書だが、輪湖自身が論じている通り、帰国願望者の高い比率は戦争を唯一の理由としていない。帰国したがるのは戦前移民の大半の特徴である。しかし、戦争が深刻になり、移民に対する規制が厳しくなればなるほど、その帰国願望が増していくとは否めない事実である。

「深まりゆく移民のなやみ」において半田知雄は戦時中の日系社会の「一般的な空気」(p. 626)を語るとき、戦時中の移民の帰国願望を繰り返し主張する。「戦争がすんだら…」で始まる条件節は、何回にもわたって使われ、その帰結節としては「みんな日の丸のもとへいって働く」(p. 634)、「日の丸の旗のもとで暮らしたい」(p. 635)、「東亜の楽土へいける」(p. 636)など、実に多様である。

移住国において「日本人として」生活することを余儀なく禁じられた移民にとって、戦争が終わり、日本が勝利し、再び天皇の赤子として生きられることは夢であった。帰るべきところを日本人として生活できるところと結びつける心理的メカニズムは大事である。

ここで特記すべきものとして、半田が言及する戦時中の南洋や海南島再移住論 (p. 627) がある。戦前に旧植民地からブラジルへ再移住した移民が全くいなかったというわけではないが、その数はごく限られている。「東亜の楽土」を実際に自分の目で見たことのある移民は少なかったにもかかわらず、大東亜共栄圏は日の丸が翻る場所であり、日本人がいるべきところとして想定され、海南島や南洋は再移住に最も相応しい場所と考えられた。邦字新聞の『聖州新報』が1939年4月29日に「国際変化から観て吾々不同化分子は亞細亜に帰ろ」という記事を載せているのは当然かもしれない。¹¹⁾

戦時中、移民は戦争が終わったら「日の丸の元に帰る」という夢を見るが、はたして何人が移住前に住んでいた場所をその帰省先と想像したのである。経済的な側面から見れば、戦前の日本移民の大半はブラジルにおいてある程度の成功をおさめているし、ブラジル育ちの準二世とブラジル生まれの二世も相当の数を占めていた。

ここで、移民が想定する帰国先とは、「日本人として生きられる」場所であり、大日本帝国内に他ならない。その場所というのは、必ずしも現存する空間でなく、再構築された想像の空間である。細川周平は、移民の郷愁論を編んだ時、想いを「遠くにありてつくるもの」(細川、2008)として論じているが、戦時に移民が想像する「戦後」と「祖国」もまさに造られたもの

といえる。

その延長線においてのみ戦時中の海南島再移住論を理解することができる。約束されたその想像の空間は、敗戦とともに喪失される。移民は戦時に渴望した日の丸の元へは永遠に帰れなくなる。何よりも、戦争の終焉と移民が想像する戦後は、祖国との繋がりを強く意識している。だからこそ、移住国での規制が厳しくなればなるほど、移民は祖国にすがっていく。それについて半田は書き記す：

「郷愁が深まると同時に、祖国に対する依頼心も深まつた。祖国に対する依頼心は、当然のことながら為政者の言を信じる傾向を生んだ。こうして、各自に自覚される愛国心は、伝統的盲従主義を強化し、祖国の声一大本営発表一に対して批判を排除する精神状態にみちびいた」(p. 639)

戦時に構想され、渴望され、夢に見られた楽土へ帰る可能性は実質上1945年に終わったが、それを求め続けた人々はいまだに多かった。日本政府が送るはずであった帰国船を待つために全財産を売り払って、サントス港に押し寄せる移民の波はそれを何よりも如実に物語る。

戦争がすんでからも、移民は東亜の楽土を踏むことはなかった。移民が遠くから切望した日の丸が翻る場所は、自分たちをおいて変化した。戦後移民との出会いによって移民はそのことを痛ましく思い知らされる。ノーヴォと直面し深い挫折を味わった多くの戦前移民が「ブラジルの日本人こそ本当の日本人だ」と言い始めるのも無理は無からう。

近代がもたらした帝国主義と民族至上主義の産物であるブラジル戦前移民は、何の予告もなく時代の流れに置いていかれる。日本に生まれ、明治の思想の子どもであった移民は、移住国ブラジルの同化政策に必死と抗った。天皇の赤子として生きるため、民族教育を隠れても実施し、それが不可能になる時、もう一度一家をあげて、アジアの楽土を目指して再移住する構えを見

せた。自分たちがかつて強要された思想を信念に変え、それを死守する覚悟で臨んだ移民は、「時代遅れ」というラベルを貼られ、その同じ思想のせいで新しい日本の枠組みの外に追い出される。半田が説く「移民のなやみ」とは、まさに戦前移民のその悲劇的な宿命である。

結びにかえて

本稿では『移民の生活の歴史』を取り上げて戦前ブラジル日本移民の戦争経験が半田知雄の思想においてどんな意味を持っているかを議論し、半田がいう「移民のなやみ」の正体を探ってみた。本文で見たとおり、半田にとっての「なやみ」は戦前移民特有のものであり、祖国の民族至上主義や帝国主義・軍国主義とブラジルの同化政策の狭間にされた移民が、敗戦とともに祖国との繋がりを一方的に断ち切られ、戦時期に構想した祖国への帰国が不可能になる時に生じる喪失感によるものだと論じた。また、戦後移民との出会い、それからそれぞれの戦争経験の相違により、戦前移民は自分がかつて構想していた祖国の喪失を改めて知らされ、それは自分の心理を大きく決定付ける要素である。最後に、半田がいう「移民のなやみ」を念頭に置きながら、ブラジル日系社会史の大きなテーマである勝負抗争について一言を加え、本稿を閉じたい。

ブラジルや日本のメディアの中でブラジル日本移民史が話題に上れば、ほとんどといっていいくらい勝負抗争が言及される。例はいくつかあるが、最近のものとして、2012年公開の『汚れた心』（“Corações Sujos”）という映画があげられる。その作品は、ブラジル製作でありながら、日本人の有名な出演者が出でおり、日本でも上映され、話題を呼んだ映画である。¹²⁾

『汚れた心』の粗筋はこうである。時は1945年。サンパウロ州の田舎のある村に、ブラジル政府の弾圧を受ける日系コミュニティーがある。日本の敗戦をきっかけに、その村にそれを信じる者（組合長を始め、コミュニティーリーダーを中心）とそれを信じない者（元大日本帝国軍人が率いるグルー

プ) という二つのグループが現れる。村人の大半はどちらのグループにも直接参入しないが、迫害を恐れ、元軍人グループに近い態度をとる人が多い。まもなく、日本の敗戦を信じ、他の村人を啓蒙しようとする者は「国賊」というラベルを貼られ、暗殺される。村で小さな写真店を営むタカハシ（伊原剛志）は、元大日本帝国陸軍大佐であるワタナベ（奥田瑛二）とそのグループに愛国心を煽られ、躊躇しながら殺人を働く。タカハシの行動は、その時まで円満に進んでいた彼の結婚生活に亀裂を走らせ、結局、村で日本語学校の先生をしていた妻ミユキ（常盤貴子）との別れに至る。後悔に苦しむタカハシは、自分や他の村人を騙したワタナベを殺害した後、ブラジル警察に自首し、刑務所に送り込まれる。数年後、年をとっているタカハシは、出獄後にやり直した写真店で自分がかつて殺害した男性の娘と再会し、自分の暗い過去と直面させられる。その時、アケミというその女性に、元妻のミユキが再婚し日本に帰ったと知らされる。

言うまでも無く、この作品は臣道聯盟事件を基にしている。上記にあげた問題の他に、部分的であるが、日語学校の閉鎖と日本語教育に対する取締り、敗戦に伴う円売りや詐欺事件なども取り上げている。しかし、この作品を論じるに当たって、筆者は敗戦を信じた者とそれを信じなかった者の対立ではなく、その接点に注目したい。

ブラジル日系社会において、勝負抗争は長い間タブーとされており、先行研究が存在するものの十分であるとは言えない。ブラジル日系社会は、勝組と負組に割れ、テロ事件にまで及んで対立したという話は有名であるが、その対立のどちら側にもはっきりと属せず、ただ茫然として敗戦に伴う深い侘しさに包まれた一般的な移民の心境はいまだに汲み取られていない。まさに『汚れた心』における村人の大半の立場である。

半田知雄は負組であった。『移民の生活の歴史』が1970年に書かれたこともあり、勝負抗争は端的にしか取り上げられていない。半田が書きたくても、書ける状況ではなかっただろう。しかし、本書を丁寧に読み返すならば、勝負抗争に到達する一般的な移民の心理の変遷がそこに込められている

ことが分かる。負組と勝組の対立的な表象に飼い慣らされている者としては、この二つの対立するグループの根底に存在する感情の共通点に驚かされる。

勝負抗争は、日本の帝国主義や天皇崇拜、軍国主義や民族至上主義のみが起こした悲劇ではない。かといって、ブラジル政府が一方的に下した同化政策がその唯一の原因でもない。勝負抗争は、移民が祖国にもっともすがっていた時に、その祖国が意味するすべてのものとの絆——それは移民の精神を規定するほとんどすべてのものを指す——を断ち切られたからこそ起こった現象である。一般的な移民の心理の変遷を見つめることによって、我々はブラジル日系社会史の暗黒時代といわれる勝負抗争に光を与えることができるかもしれない。その時、勝組と負組の対立的な立場のみならず、その意外な類似性も議論されるべきだろう。その問題を今後の課題にして、本稿を終える。

[注]

- 1) 1973年は最後の移民船がブラジルに到着する年である。それ以降の移民は空路によって渡航するが、少数であるため、本稿では便宜上1973年を戦後移住の終了期とする。
- 2) ブラジル日本移民の総数を、戦前移民と戦後移民に大別するのは、一見、暴力的に見えるかもしれない。確かに、ブラジルへの日本移民の流れは、「戦前」と「戦後」、移住時期だけでは説明できない複雑さを孕んでいる。あくまでも一つの例だが、移民会社やブラジル側の干渉が強い移住開始まもなくの移民と、30年代に入ってからの移民運動は明らかに異なる。戦後になれば、コチア農業組合の主導による青年移民の導入もあり、呼び寄せ移民もたくさん見られる。筆者は、ブラジル日本移民のその多様性を認めている。しかし、ここであえて戦前移民と戦後移民という単純な区別をするのは、本稿の論点が移民の戦争経験だからであり、移民がどこで、それからどういう形で第二次世界大戦を経験したかという点を重視したからである。読者の了承を願いたい。
- 3) 『移民の生活の歴史』の成立過程と性格に関して、拙稿を参照されたい（ソアレスモッタ、2013）。
- 4) 本稿では「勝負抗争」を敗戦とともにブラジル日系社会に勃発した暴動およびその混

乱期の総称として使用する。日本の戦勝を信じた勝組（または「信念派」）と日本の敗戦を認めた負組（または「認識派」）の対立を指す。後述するが、日本の帝国主義や軍国主義思想とブラジル政府の国家主義的政策が醸し出した悲劇である。主に臣道聯盟事件とそれに伴う暗殺、テロ事件などがある。本稿では、勝負抗争を中心に論じないが、半田知雄の思想を辿り、コロニアの暗黒時代と呼ばれるその混乱期を再考する手掛かりを提案したい。

- 5) 煩雜を避けるため、以降の『移民の生活の歴史』の引用は、頁番号のみを明記する。なお、本稿のすべての引用は1970年初版に拠った。
- 6) 戦前移民は自己の歴史を顧みる時、その他者として戦後移民が据えられるのは、半田知雄の思想を理解するのに極めて重要である。むろん、戦後日系社会の「コロニア」としてのアイデンティティの成立や戦後移民史を単純視し、それを簡単に片付けるつもりはないが、戦前の帝国主義、民族至上主義、天皇崇拜などの思想や教育概念がまだ広くかつ強く根付いている日系社会に、1953年からその思想を否定的に判断する戦後日本社会を知っている戦後移民が入るのは、戦前移民の心理を大きく変化させたことである。本稿では、半田知雄の思想においてその他者＝戦後移民との出会いの重要性を注視してもらいたい。
- 7) 戦前移民と祖国に対する強い意識は今まで広く論じられており、移民の移住ストラテジーとも大きく関わる問題である。その問題についての参考文献は豊富だが、とりわけ細川、2008を参照されたい。
- 8) アルチュール・ド・ゴビノー（1816-1882）はフランスの貴族主義者・白人至上主義者。彼の『諸人種の不平等に関する試論』（“Essai sur l'inégalité des races humaines”）は、20世紀初頭のブラジルの思想界・政治界に大きな影響を与え、排日言説にも使用された。
- 9) これらの作品は、『ブラジル移民の生活—半田知雄画文集』（無明舎出版 1985年）に収められている。当画文集に収められている作品の製作時期については、本書の「序」において、宮尾進は「（前略）第二次大戦中、ブラジルの敵国人となった日本移民は、いろいろと圧迫を受け、風景画を主とする半田さんは、そとへ出て写生することもなかわなかった、ということです。そんな時、半田さんは画室で、ケント紙や板などに“移民の生活”的姿を数多く描き続けられました。戦後長い間、その描きためられた絵は、丸められたままアトリエの片隅におかれていたのですが、これこそブラジル日本移民の貴重な資料ということで、私たちの研究所がプロモーターとなり、資金を集め、きれいに裏うちをし、額ブチをつけて、サンパウロにある「日本移民資料館」に寄贈していただきました」と記している。
- 10) 輪湖俊午朗『パウル管内の邦人』（1939）。本稿では取り上げないが、戦前移民の心理を議論するたびに半田知雄は輪湖のこの著作に繰り返して戻っている。
- 11) あくまでも一つの例だが、1939年4月29日のこの記事は公孫樹（社長の香山六郎）によって書かれ、それにおいてアジアへの再移住論が強く説かれている。『聖州新報』は

1941年7月30日に廃刊となる。

- 12) 『汚れた心』、2011年製作、2012年公開。アルバトロス・フィルム・インターフィルム。ビセンテ・アモリン監督。原作はブラジル人作家フェルナンド・モライスの同名の小説。出演者は伊原剛志、常盤貴子、奥田瑛二その他。

[主な参考文献]

移民80年史編纂委員会 『ブラジル日本移民80年史』(移民80年祭祭典委員会・ブラジル日本文化協会) 1991。

細川周平『遠きにありてつくるもの—日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』(みすず書房) 2008。

細川周平『日系ブラジル移民文学 I—日本語の長い旅 [歴史]』(みすず書房) 2012。

細川周平『日系ブラジル移民文学 II—日本語の長い旅 [評論]』(みすず書房) 2013。

ソアレス モッタ フェリッペ アウグスト「半田知雄著『移民の生活の歴史』の成立を巡る—考察」(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室) 『日本学報』第32号 2013。

半田知雄『移民の生活の歴史—ブラジル日系人の歩んだ道』(家の光協会) 1970。

サンパウロ人文科学研究所編『ブラジル日本移民・日系社会史年表—半田知雄編著改訂増補版—』(サンパウロ人文科学研究所) 1996。

前山隆『移民の回帰運動』(NHKブックス) 1982。

輪湖俊午朗『バウル管内の邦人』『日系移民資料集 南米編』第25巻 (日本図書センター) 1999。

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

“The Immigrant’s Suffering” in Tomoo Handa’s “The Immigrant Life”:
 Focusing on the Narrative of the Japanese-Brazilian Community History
 and the War Experience of the Japanese immigrants in Brazil

Felipe Augusto SOARES MOTTA

On this paper I propose a discussion on the meaning of “the immigrant’s suffering”, an expression I took from the 9th chapter in 1970 Handa Tomoo’s masterpiece *The Life of the Japanese Immigrant in Brazil* (*Imin no Seikatsu no Rekishi*).

I argue that Handa, a pre-war Japanese immigrant to Brazil, conceives the 2nd Great War as a decisive factor in the immigrant’s psychology transformation. The difference here relies not only on the time of the immigration to Brazil, but mainly in where the immigrant experienced the war, what this experience meant and how it is perceived.

Taking into account the war experience difference between those inside the Japanese Empire and those outside of it, it is possible to see in Handa’s thought a tendency to consider the immigrant’s war experience as a long process, which begins with the nationalistic policies of Brazil’s Vargas government from the 1930’s and extends all the way to the *Kachi-Make* Dispute in the post-war. More than that, we can see that Handa places great meaning in the encounter between the pre-war immigrants with the post-war immigrants in the 1950’s, a crucial moment where the pre-war immigrants are confronted with their own countrymen.

Based on that, I argue on this article that not only the impossibility of returning to Japan after the war, but the lost of the long-desired homeland as conceived by the pre-war immigrants during the war, due Japan’s defeat, as well as the difference between the war experiences of the pre and post-war immigrants itself is one of the root-causes of the immigrant’s suffering. I end the article suggesting a new approach towards the *Kachi-Make* Dispute.